

平成29年度学校評価総括表

奈良県立登美ヶ丘高等学校

4

教育目標	自他敬愛に基づく協調の精神に富んだ心豊かな人間性を育成するとともに、自ら定めた目標に向かって意欲的に取り組む態度を育てる。		総合評価
運営方針	日々の学習活動を大切にして生徒の進路実現を目指すとともに、学校行事や部活動を通して「知・徳・体」のバランスのとれた生徒を育成する。		
平成28年度の成果と課題	本年度重点目標	具体的目標	
30周年記念式典等、生徒を主人公として前面に押し出した取組は周囲からも高い評価をいただき、生徒の成長も確認できた。今後も本校教育の特色の一つとして位置づけ発展させたい。 日々の教育活動では部活動や勉学にまじめに取り組んでいる。1年次からのキャリア教育の推進によって、自らの目標を明確にし、主体的・積極的に取り組む姿勢を育成したい。生徒の学力向上のためにALや観点別評価等について、各教科はもちろん学校全体で創意工夫しながら取り組み、教員の授業力のさらなる向上を目指す。各課題に対する教員の資質を高めるための研修を実施するなど、教員間の連携を強めて、一層の組織力強化に向けて取り組みたい。	キャリア教育の推進	・学校教育のあらゆる活動を通して、将来のビジョンを描くことができるように進路指導を充実させる。 ・規範意識を高め、信頼される人間の育成を図り、コミュニケーション能力を向上させる取組を推進する。	
	学習意欲と学力の向上 自立した学習習慣の確立	・できるだけ早く進路目標を設定させ、目標達成のためにHRや個人面談を充実させる。 ・基礎基本を大切にし、論理的思考力・表現力・判断力を育成するために授業改善や工夫を図る。	
	グローバル人材育成(国際理解)の推進	・グローバルなコミュニケーション能力を高めるために、英語教育を重視する。 ・郷土の歴史や風土を知り、郷土を愛する精神を育成する。	
	地域との連携	・本校教育活動に対する地域住民の理解を得るための取組を推し進めるとともに、地域の持つ教育力を積極的に取り入れる。 ・開かれた学校としてあらゆる機会を利用して情報を発信する。	
学校の組織力の強化と教育力の向上	・目標達成状況や課題の共有化・焦点化を図り、解決に向けた方策を探る。 ・学校評価を活用し、外部評価を念頭に置いた改善を図る。 ・教育相談体制の構築による生徒支援体制をさらに強化する。		

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価 (4段階の取組)	成果と課題	改善方法	学校関係者評価	
第1学年	生徒が楽しく通学できる環境づくりを行う。	生徒・教員全員が集団意識を持って取り組む。	4	(成果) ○学校行事(体育大会・文化祭・球技大会等)に対し、各クラス協力して取り組む姿が見られた。 (課題) ○総合学習や授業内でのAL等も含め、生徒がより主体となって企画・立案・計画を行い、協力的に取り組むことが望まれる。	○素直で穏やかな集団である。決められたことや指示されたことに対してはまじめに取り組む姿勢が往々にして見られる。反面、チャレンジしたり、1歩踏み出したりと、より上を目指す力が弱いように思われる。総合学習やOT、各授業でのAL等の学習活動を通して、また行事においては、その目的をしっかりと理解させ、明確な目標を示したり、設定させたりすることで、主体的に物事に取り組む姿勢を育てていきたいと考える。	<p><全般について></p> <p>○地域の公立高校と地域の中学が非常に近い関係であった一年間だと感じている。設置者の違いという垣根を乗り越えて、うまく協力できている。</p> <p>○地域での評判もとてもよい。</p> <p>○「秋風のコンサート」等を介して地域の学校というイメージが強い。その地域とのつながりが登美ヶ丘高等学校の特徴だ。自分の子どもに登美ヶ丘高等学校に入ってもらいたいという友人が多く、生徒の評判もよい。</p> <p>○進路指導部の取組がよかったように思う。目標を変えた取組が反響を呼んでいるのはよい。</p> <p>○学校内で工夫し、重点目標、具体的目標について、前年度の成果と課題も含めて整合性を持たせ、PDCAを機能させるために次年度に活かせるような資料(表)にしていきたい。</p> <p>○全校的なつながり、評価を次にどのように活かすかという視点を強調されるとよい。</p>	
		円滑な情報伝達と共有、協力(報告・連絡・相談)。	4	(成果) ○11月の学年会議での情報交換だけでなく、クラスや生徒の様子、変化については主任への報告を行い、状況により教育相談支援室およびスクールカウンセラーとの連携を図ってきた。			
	登美高生としての自覚を持たせる。	基本的な生活習慣(遅刻・欠席・提出物等)を身につけさせる。	4	(成果) ○不登校傾向の生徒を除くと、比較的遅刻、欠席は少なかった。 ○11月より、生活習慣(遅刻・欠席・服装・挨拶など)指導強化として、積極的に教員から働きかけたことは成果があったと言える。更に3学期は、教室内および身の回りの整理整頓を意識させるような指導を行った。 ○入学当初の部活動入部状況は非常に良く、80%後半の入部率であった。その後続けられない生徒が出てくるも、80%の入部率は保たれている。			○不登校傾向およびその予備軍の生徒に対しては、学年内での情報共有を密に行うと共に、教育相談支援室およびスクールカウンセラーとの連携を更に図っていきたくと考えている。
		挨拶の励行。	3	○生活指導については、生徒も教員も当たり前のことが当たり前に行われている状況が日常的に継続できていけるようにしていきたい。提出物の提出状況の改善および整理整頓の励行においても、事ある毎に指導を行っていくこととする。			
		部活動への積極的参加を促す。	4	(課題) ○不登校傾向の生徒が多く、全員が揃うことのない学年であった。 ○限られた生徒の提出物の提出状況の悪さと積極的な挨拶の励行。 ○家庭学習との両立に対する指導および退部生徒の学校生活における目標設定とその指導。 ○オリターや生徒会活動への参加状況が悪い。			○部活動においてはその活動の充実とは、学習面との両立が図られ、進路実現にプラスとなる活動でことであることを体現できるように指導していきたい。また、喫緊の課題である、オリターや生徒会活動への参加状況改善に向けては、担任や生徒会指導部により、全体への呼びかけと特定の推進できる生徒への個別の声かけを続けていくことで、人材の発掘を進めていきたい。
	目標設定とそれに向けた自主的な取り組みを行わせる。	具体的な将来或いは進路の目標が設定できるように導く。	3	(成果) ○進路HRおよび学年集会等を通して、出来るだけ早い時期から進路目標設定に対する情報提供等を行うことができた。 (課題) ○実力養成講座の開講や模試対策も各教科独自で行ってきたが、まだまだ参加生徒が少なく、自主的に自らの将来に向けた取り組みが行われているとは言えない状況である。 ○教員側の焦りと生徒本人たちの将来に向けての取り組む姿勢に温度差がある。 ○入学当初より学力差の大きい学年で、低学力生徒の底上げと成績上位層を伸ばす取り組みの両立が課題であり、まだまだ工夫が必要である。			○進路実現に向けては、情報提供を今後も継続的に行っていく、少しでも早く行動に移す生徒が一人でも多くなり、全体に広がっていくように誘導していきたい。その為にも、家庭学習習慣の定着を図ることが最重要課題であるが、家庭学習を行うことが当たり前のことであるということが、学年全体の雰囲気となるようにしていきたいと考える。
基礎学力の定着を目指す。		3					
第2学年	健康的で安定した学校生活を送らせる。	欠席遅刻の様子に目を配り、学期にそれぞれ5回以上の場合には個々への指導を行う。	4	(成果) ○担任を中心に個々に応じた対応や相談、指導を行い、適宜家庭との連絡を行っている。教師間の情報共有ができています。 (課題) ○特定の生徒に遅刻が多くなり、その原因が家庭であることが多い。	○昨年度と比べると落ち着いた雰囲気では学校生活を送れている。しかし大きな悩みを抱える生徒もおり、一人一人に細やかな対応が必要である。学校カウンセラーとも連携しながら心を支えていきたい。 ○また、学習については具体的な進路目標を掲げることで自主的な家庭学習の時間を確保させ、進路実現に繋げていきたい。それぞれの進路選択を尊重しつつ、より広い目で選択するためには教師側の力が必要となる。個々にあった指導をすべく学年全体で取り組んでいきたい。		
		保健室来室の様子を見ながら心身の問題解決策を学年全体で考える。	4				
	目標を立て自主的に学習する習慣を身につける。	毎日の家庭学習の時間確保のため、課題の出し方の工夫をする。	4	(成果) ○各教科でテスト対策を始め週末課題、模試対策等、さまざまな方法で課題を生徒に投げかけることができています。 (課題) ○出された課題はしているが、それ以上の進路に向けた家庭学習が少ない。			
		定期的な家庭学習状況や授業への集中度の自己評価をさせる。	3				
	他者への思いやりの心を育て、互いの違いや個性を認め合い助け合う社会性を身につけさせる。	部活動や個人の取り組みを大切にしながら個々の成長に繋がるように導く。	4	(成果) ○総合的な学習の時間ではクラスを超えたグループを作り、力を合わせて研究に取り組めた。 ○クラスや部活動を超えた小さなグループでもお互いの個性を尊重し、助け合っている姿が見られる。 ○全体的に学校行事への取り組みがよい。 (課題) ○来年度もこの状態を維持できるように努力が必要である。			
		HRや総合的な学習の時間の活動を通し、自己の役割を果たし、協力して活動する姿勢を育てる。	4				
学校行事に積極的に取り組み、助け合いの大切さを体得させる。	4						

第3学年	健康的で規律正しい学校生活を送らせる。協調性に富んだ人間力を身につけさせる。	生活状況を的確につかみ、原則として欠席・遅刻が5回を超えれば、家庭とも連携して解決を図る。	3	3	(成果) ○家庭との連絡を密にする中で、家庭での生活状況を的確に把握することができた。できる限り時間をかけてきめ細かく話し掛けることが、生徒の心の安定と学習への意欲につながる。学年の後半に入り、遅刻・欠席をする生徒が増えた。 (課題) ○健康的で規則正しい生活が、進路実現のためには重要であること、目標に向かってクラス全体でひたむきに努力することが一人一人の力を伸ばすことを、粘り強く指導することが大切である。	○入学当初から基本的な生活習慣と規範意識を身につけさせるよう最大限の努力をして、その達成の上で社会に出るに当たっての人権意識・公共心と確かな知識、思考力を習得させなければならない。 ○生徒一人一人としっかり向き合い家庭と連携をとって、3年間という時間を計画的に過ごさせたい。生活指導を行う上で大切なことは保護者の理解である。校則の意義や目的を丁寧に説明して、学校の指導方針を理解してもらい、協力してもらうことが必要である。 ○進路指導面でも粘り強い学習を指導することを保護者に理解してもらい、ともに手を携えて生徒一人一人の進路実現を果たしたい。実力養成講座ではそのねらいをより明確にして内容を詳しく生徒に説明すること、予定通りの開講および欠席理由の確認による講座内容の点検等が必要と考えられる。 ○安心できるホームルームをつくり、生徒の悩みを引き出せる環境を整えることで、生徒の可能性を最大限に伸ばすように努力することが求められる。
	自らの進路目標に向かって、向上心を持って学習に取り組むように指導する。学習方法を工夫し、自主的に学習する習慣をつけさせる。	チャレンジタイムと総合の時間を活用して、進路についてしっかりと考えさせる。学年の1/3(80名)以上の生徒が各科目の実力養成講座に参加し、自習室を活用するように指導体制を整える。 進路実現のための、基礎学力と応用力を身につけ、集中して学習に取り組めるように指導する。	3	3	(成果) ○LHRでは進路情報の提供、推薦入試・一般入試に向けた注意点の確認を行った。 (課題) ○授業は静かに受け、夏の実力養成講座には多くの生徒が参加した。ただ2学期になり欠席者が出てきた点が課題である。 ○自習室での学習態度はよくなったが、2学期後半に利用者が減ってきた。 ○受験勉強のスタートが遅かったと感じている生徒たちがいるので、受験の意識付けと家庭学習の習慣づけを早い時期から行うことが大切である。	
	積極的に学校生活に取り組ませ、連帯感・協調性を高める。他者と支え合える社会性を身につけさせる。	学校行事に積極的に取り組ませ、責任を果たす大切さ、協力する素晴らしさを体得させる。 部活動に引退まで取り組ませ、達成感の中で人間の成長を促す。 さまざまな学校生活の中で、互いの違いや個性を認め合いながら、進路実現に向けて、クラス一丸となって努力できる仲間づくりにつとめる。	4	4	(成果) ○学校行事に積極的に取り組み、責任を果たすことの大切さ、協力することの素晴らしさを感じていた。 ○高校生活最後の一年を充実したものにしたという思いを行動に結びつけていた。 ○最後まで部活動に取り組むことで、人間的に多くのことを学んだ。引退後はその達成感の中で進路実現に向けて取り組んだ。 (課題) ○受験勉強の日々の中で、相手のことを思いやる意識が行動となって現れ、互いを支え合う姿を見ることができ、人としての成長を感じる事ができた。つらくとも安易に妥協せず、周囲に流されず、自分の第一目標に向けて最後までひたむきに努力するように、教師側が粘り強く指導することが大切である。	
	教育体制の整備と教職員の指導力向上に取り組む。	厳粛で温かみのある入学式・卒業式、規律のある始業式・終業式・修了式を企画・運営する。 学校評価計画表の作成と総括会議を主催し、本校の教育活動の点検と教職員の指導力向上を目指す。 各種アンケートを行い、保護者・生徒・外部関係者等の本校への評価を明らかにし、教育活動に反映させる。 オーストラリア語学研修の企画・運営と事前研修・準備の中心的役割を担い、グローバル教育の推進に努める。	4	3	(成果) ○本校の伝統を受け継ぎながら、厳粛で心に残る式典が実施できた。生徒の司会による入学式も好評である。始業式等も、生徒の集中した態度の中、節目にふさわしい、まとまりのある式が実施できた。 (成果) ○学校評価計画の目標・方策を明確かつ簡潔にまとめ、その内容を徹底し実施へと結びつけやすいように改良した。 (課題) ○実施していく中での問題点は分掌だけで捉えるのではなく、連携を強化し、全体のものとする必要がある。 (成果) ○アンケートは、その考察により有効活用し、高評価を励みに課題は改善に生かす学校の活性化へつなげている。保護者アンケートの、学校の活動へのプラス評価は80%以上の目標を超え、学校への好意的な関心の高さが窺えた。 (課題) ○保護者アンケートの回収率51%を目標(60%)に近づけたい。	
総務企画部	育友会・各種団体・同窓会との連携を深める。	育友会・各種団体との円滑で緊密な連携・協力体制を築く。育友会活動への保護者の積極的な参加を働きかけ、組織の活性化を図る。 定期的な監事会や監事間の連携で同窓会活動の活発化を図る。	4	4	(成果) ○参加生徒の満足度は目標の90%以上を得た。アンケートに基づき、より良い事前研修・語学研修に向けて業者との交渉や保護者説明会等に取り組んだ。オープンスクールや国際理解(総合)の授業等、研修後の活動にも力を入れ、生徒もプレゼンテーションで活躍した。 (課題) ○この研修を期待して入学する生徒もおり、グローバル人材育成の面から、より良い形で継続したい。 (成果) ○育友会や各種団体との円滑な連携により、行事を順調に行えた。役員や委員の各会議・研修への参加率は95%と高く、役員委員どうしのつながりも強くなった。育友会大学訪問(立命館・京都産業大学)は44名参加(昨年より8名増)を得た。 (課題) ○育友会総会は100名目標に対し69名の参加にとどまった (成果) ○同窓会会長の交代にあたり、引き継ぎも問題なく新しい監事での体制に移行できた。 (課題) ○同窓会総会の参加者は返信葉書数が少なく、出席者は例年と同程度(60名)であった。大学での行事等で不参加の新卒生が多く、新卒者以外の参加者増加にも向けて今後の持ち方や広報・連絡の検討が必要である。	
	本校の活動を広報し、教育活動の周知に努める。	学校案内誌『碧き風』の制作、生徒主体のオープンスクールの実施、学校ホームページの活用を通じて情報発信と広報活動を推進する。	4	4	(成果) ○運営の全てを生徒が行った2度のオープンスクールは990名の参加者を迎え、生徒の主体性をアピールする好機となり大変好評であった。「碧き風」は生徒の活き活きとした姿が伝わり、見応えがあると好評である。HPについては行事終了後、早く更新し更新回数も増やし、案内・連絡にも活発に活用した。	
	学力向上を目指した魅力ある授業の創造	生徒の学習意欲を高める魅力ある授業を目指し、アクティブ・ラーニングの形態を取り入れた授業をすべての教科で実施する。 生徒の学力向上を目指し、シラバスを活用した観点別評価をすべての教科で推進し、生徒一人一人に応じた手立てを探究する。	4	3	(成果) ○生徒の主体的な学びを推進するアクティブ・ラーニング型の授業公開を学期に1回実施し、情報機器を活用して学びの意欲を高める授業のあり方を共有できた。 ○今年度からシラバスを改良して、生徒に自分の学力を分析的に振り返らせたり、定期考査でも観点別に出席するなど、指導に生かせる観点別評価を始めることができた。 (課題) ○生徒に自らの学力をメタ認知させるためのワークシートや考査問題を充実させるとともに、観点別の評価割合の研究をすすめる必要がある。	
教務部	授業時間確保と少人数授業の一層の推進	時間割の変更や考査前の授業調整を円滑に行い、各教科間バランスのとれた授業時間を確保する。 特別教室や講義室の活用を工夫して、生徒の実態に応じた分かりやすい少人数の授業を推進する。	3	4	(成果) ○考査前、早めに授業時間の調整を実施し、授業時間を確保することができた。 ○数学、英語等で少人数授業を実施し、低学力の生徒へのきめ細かい指導や、生徒一人一人の主体的な学びを充実させる手立てを工夫できた。 (課題) ○選択制の授業の時間割変更の際、教室が重なったり、生徒に連絡できていなかったりなどのミスが何度あったので改善に努めたい。	
	総合的な学習の時間「優」の円滑な運営	教員間の連携を密に行い、培うべき力や取組の詳細の共通理解を図ることで、PDCAサイクルを効果的に機能させる。 情報室、第2情報室の活用や地域の方々等外部講師の招聘により、生徒の探究的な活動を活性化し、学力の向上を図る。	4	4	(成果) ○各学年の教務担当者と学年主任が連携して、学年の学習計画やワークシートの作成などを工夫して進めることができた。 ○大学教授や地域の方に外部講師として指導いただいたり、情報室や第2情報室などを活用して、生徒の主体的な調べ学習を促進できた。 (課題) ○少人数できめ細かい指導をしていただいたので、特別教室の使用が多くなり、学年間で使用が重なるなど調整に苦慮した。	
	学友会・各種団体・同窓会との連携を深める。	育友会・各種団体との円滑で緊密な連携・協力体制を築く。育友会活動への保護者の積極的な参加を働きかけ、組織の活性化を図る。 定期的な監事会や監事間の連携で同窓会活動の活発化を図る。	4	4	年々見直しを加えて、より良い形になってきている。 ○学校評価については評価項目を精選し、集中的に課題に取り組む。 ○行事について、他分掌や関係機関と連携をとり、内容改善に取り組む。そのため連絡会議を計画する。 ○生徒主体の行事を充実させ、分掌・教員の協力体制を密にし、学校全体を活性化し、一体感を高める。 ○語学研修は教員の負担や安全性、研修の充実度を考え、参加人数を限定するか、教員の増員等、実施方法の再考が必要である。	
学友会・各種団体・同窓会との連携を深める。	育友会・各種団体との円滑で緊密な連携・協力体制を築く。育友会活動への保護者の積極的な参加を働きかけ、組織の活性化を図る。 定期的な監事会や監事間の連携で同窓会活動の活発化を図る。	4	4	○観点別評価の研修会を充実させたり、アクティブ・ラーニング型の授業公開の回数を増やすなどして、全教員が指導力を高められる体制を整え、指導と評価の一体化をより推進する。 ○時間割変更の決まりを教務部で文書で再確認したり、連絡の明確化のため、教室変更のホワイトボードを新設する。また、教科担当から教室変更のときは、教室使用予定表を必ず提出いただくようにする。 ○指導計画を早めに綿密に立てることで使用教室の確保に努める。また、「グローバル人材の育成」という学校の教育目標に沿った指導のあり方や年間計画の立て方を研究する。		

生徒指導部	基本的な生活習慣の確立とマナーの向上をめざす。	遅刻の減少を目指し、毎月2%未満を目標とする。	3	3	<p>(成果)</p> <p>○全体として、1学期1%、2学期1.6%の遅刻率となった。今後も遅刻率の減少を目指して取り組む。</p> <p>○計画通りにすすめることができた。</p> <p>(課題)</p> <p>○登下校マナーの向上のため、通学路指導を強化しなければならない。</p> <p>(成果)</p> <p>○奈良県生徒指導連絡協議会の計画日に実施できた。</p> <p>○生活委員による挨拶運動を行い、十分にできた。</p>	<p>○来年度の全校集会は、6月・11月・2月の各月1日の実施を予定している。</p> <p>○中登美ヶ丘6丁目周辺の登下校指導を強化する。</p>
		学期に一回の全校集会と毎日ショートホームルームでの指導を行う。	3			
		週3回の正門と周辺交差点の通学路指導、各学期に1回の自転車通学生集会の開催と安全意識の定着を図る。	3			
		月3回のターミナルおよびバス乗車指導を行う。	3			
		生活委員会によるクラス・校舎内掲示用の標語とポスターを作成し、登下校マナーの向上を行う。	4			
	『生徒が、瞳を輝かせ、胸を張って、笑顔で登下校』を目標に、生徒理解に努める。	特別支援を必要とする生徒の支援と、関係分掌との連携を密にし、明るく健全な生徒の育成に努める。	3	3	<p>(課題)</p> <p>○教育相談、特別支援を必要とする生徒に対して、学年、スクールカウンセラーと更に連携をとっていく。</p> <p>(成果)</p> <p>○「いじめアンケート」と「心と学校生活に関するアンケート」を用い、共通理解に努めることができた。</p> <p>(課題)</p> <p>○昇降口での立哨指導において、自然な挨拶ができるように更にすすめていく。</p>	<p>○挨拶運動を継続して行う。</p> <p>○LHR等での「学級級自」の時間を確保し、担任・副担任とのコミュニケーションをもっと増やせるようにする。</p>
		アンケート「教えてください」を活用し、「いじめ等」のアンケートを基に個々の生徒理解に努める。	3			
		職員と生徒が自然に挨拶をかわす、明るい校風の確立。	3			
		人権教育部との連携を図り、合同ホームルームの充実を図る。	3			
		学校行事において、生徒会役員およびオリターとの連携を密にし、その充実を図る。	4			
部活動の活性化と学校行事を通じて積極的に取り組める生徒を増やす。	3	3	<p>(成果)</p> <p>○駅前での「交通安全マスコット配布運動」などでは、生徒会役員と協力してできた。</p> <p>(課題)</p> <p>○文化祭では、受付業務などが更にスムーズに実施できるように修正していく。</p>			
文化祭実行委員会の活動を補佐し、その充実と活性化を図る。	3					
進路指導部	向上心を持って、粘り強く努力した生徒が希望の結果につながるようサポートできる体制を確立する。	生徒個々に対しては、校外模試を利用した動機付けを行い、スケジュールに基づく学習に取り組ませる。	3	3	<p>(成果)</p> <p>○校外模試については、先生方へ過去問題を授業で提示していただくなど、ご協力を賜ることができた。そのため、生徒に実施日を意識させることができた。</p> <p>○面接のサポートについては、各学年、年度当初の面談に向け、アンケートを集計し利用いただけるようにした。3年生には面談前に、戦略会議を開催、さらに、模擬テストの結果を一覧にした面接シートを作成し、例年以上に生徒の状況を把握していただいた。</p> <p>(課題)</p> <p>○生徒に振り返りや成績に対する反省、次回への課題意識を持たせる方策を考えたい。</p>	<p>○面接の支援について、担任の先生が面接を通じ、生徒一人一人の現状と課題を把握し、その克服方法を明示できるよう、詳細な資料作りを努める。</p>
		集会・面談等を通じた意識付けを行うとともに、キャリア設計に対する理解を深めさせる。	3			
	生徒が、高い学習意欲を持ち、自主的に学習に取り組む姿勢を育てる指導体制をめざす。	実力養成講座を通じて、目的意識を持って自主的に学習する態度を養う。	3	3	<p>(成果)</p> <p>○実力養成講座について、多くの先生方のご協力を得て、予定通り実施することが出来た。最後まで出席した生徒には実力が付いたと思われる。</p> <p>○今年度当初、チャレンジタイムの内容は各学年に連携しながら進めることができた。</p> <p>(課題)</p> <p>○実力養成講座において、3年生に出席する意欲を持たせる方策を考えたい。</p>	<p>○生徒に対し各学期・長期休業期間毎の進路の目標を、学年だよりに掲載させていただいたり、進路だより・講話を通じ明らかにしていく。</p>
		1・2・3年生ともに、チャレンジタイムを利用し表現力を養う。	—			
	保護者に対し、必要な情報を伝えるとともに、意思疎通を図る取り組みを行う。	保護者対象の進路説明会を行い、進学・就職に対する理解を深めてもらう。	3	3	<p>(成果)</p> <p>○保護者に対する進路説明会については、2・3年生向けに、夏季休業中に実施した。多くの保護者には出席をいただいた。3年生には河合塾、2年生には代々木セミナーに講師として協力を得、入試の現状と今後必要なものを伝えることができ、充実した内容となった。その一方、保護者に「進路に対する高い意欲」や「生徒と共に最後まで挑戦する意欲」を持っていただくまでには至らなかった。</p> <p>○三者懇談会には学費など、保護者にとって必要な情報をまとめた冊子を持ち帰っていただいた。</p> <p>○三者懇談時の大学説明会は生徒と保護者に定着してきたと思われる。関西大学・龍谷大学では時間を延長して対応願った。特に関西大学ではスタッフ2人でお願ひでも対応に困るほどであった。</p> <p>(課題)</p> <p>○保護者から進路説明会などの行事に関して「このような企画があるとは知らなかった」という意見もあった。周知する方策を考えたい。</p>	<p>○生徒への情報提供については、研究会・説明会に出席していただいた先生より報告書を提出していただき、ホームルームで活用できるようにしたい。「キャリアアップ講座」と題し、放課後に全学年を対象として、職業人を招き、キャリア設計の促進を図りたい。</p>
		配布物を通じて、保護者に情報を提供する。	3			
		各種の情報提供を行い、研修会を実施するなど、本校の実態と大学受験の現実に対する共通理解を深める。	3			
	教員に対して、外部で得た様々な情報・データを示し、教員全体で指導についての共通理解を図る。	生徒に対して、あらゆる教育活動を通じて、生徒が向上心を持って取り組めるよう指導する。	3	3	<p>(成果)</p> <p>○保護者から進路説明会などの行事に関して「このような企画があるとは知らなかった」という意見もあった。周知する方策を考えたい。</p> <p>(成果)</p> <p>○各種研究会について、今年度はできるだけ進路指導部以外の先生方へお願いした。情報交換は主に報告書の回覧や学年会議で行っていただいたが、引き続き共通理解が進む方策を探りたい。</p> <p>○1年生のポケーションガイダンス、2・3年生では17分野に分けた学部学科説明会は生徒から高い評価を得た。講師先生からも、生徒の強い参加意識・運営に参加している点に高い評価を得た。しかし、学年集形式や、7分野程度に分けた説明会では生徒のモチベーションを高めるための課題が残った。</p> <p>○担任の先生より「オープンキャンパスへの参加」「キーワードから大学の研究を探るプログラム」「大学パンフレットを一つ請求する」などの呼びかけをしていただき、多くの生徒が参加した。</p> <p>○3年生に関しては、大学より送られる試験結果、および指定校推薦の結果を職員室に置き、生徒の指導に活用していただいた。</p> <p>(課題)</p> <p>○オープンキャンパスの案内など、今年から取り入れたものも多く、ホームルームとの運動など、活用の仕方に課題が残った。</p>	<p>○1・2年生の模擬テストについては、8月・1月・3月の職員会議で、先生方の参考となるよう概要を報告する。</p>
		各々の情報提供を行い、研修会を実施するなど、本校の実態と大学受験の現実に対する共通理解を深める。	3			
	人権教育部	さまざまな人権問題を自らの課題と考えて、周囲のなかまとも力を合わせて解決していく生徒を育てる。	3年間を見通した人権ホームルーム活動の年間計画に沿った取組を推進するために、指導案の作成や資料等の収集に努める。	3	3	<p>(成果)</p> <p>○各学年とも概ね年間計画にそって人権ホームルームを実施することができた。1学期に生徒指導部と合同で全学年においてインターネットの使用について講演を実施した。3学期には総合的な学習の時間と連携して第1学年において国際社会におけるさまざまな人権問題をテーマに設定し実施した。</p> <p>(課題)</p> <p>○ひとつのテーマを連続した日程で展開できないことがあった。人権を自己の課題として認識し、行動できる生徒を育てていない。</p>
他の分掌と連携しながら、多角的に人権問題にアプローチできるような工夫を行う。			3			
他者との個性のちがいをよく理解し、共に社会生活を送ることのできる生徒を育てる。		人権について発信する機会を月1回設けて、人権問題を日常的に考えられるように努める。	3	3	<p>(成果)</p> <p>○「毎月11日は人権をたしかめあう日」を活用して、人権に関するメッセージを生徒に配布し人権について考える機会を設けた。</p> <p>○また、会議・職員朝礼等の機会を活用して、人権に関する各種研修の広報を行っている。</p> <p>(課題)</p> <p>○多くの先生方が多忙のため、校外の研修に参加できる機会が少ない</p>	<p>○研修の機会を、校内での実施や回覧等の方法により補っていく。</p>
		ろう学校との交流会を複数回実施することにより、社会における共生の在り方について考える機会とする。	4			
		(成果)	4	<p>(成果)</p> <p>○ろう学校との交流会は本年度も2回実施することができた。参加生徒は1学年の一部、生徒会、家庭クラブという限られた範囲ではあるが、生徒にとっては有意義な出会いの場となっている。2学期の交流に際しては、事前にキーキョリに備えて手話の習得につとめた。</p> <p>(課題)</p> <p>○交流前後の生徒の変化が把握できていない。</p>	<p>○ろう学校との交流会は日程を工夫して、自由な交流の時間をより多く確保しながら、今後も継続していく。</p> <p>○アンケート等により、生徒の意識を把握する。</p>	

健康教育部	健康的で安定した学校生活を送らせる。	各種検診等の結果を踏まえ自ら健康的に生活できるような態度を身につけさせる。	4	4		(成果) ○学校で行う定期健康診断や各種検診、スポーツテストの結果を認識した学校生活を健康的に送るという意識は浸透してきた。	○体育授業などと連携し各種検診の結果自らの健康状態に留意した生活ができるよう指導していきたくと思う。 ○学級懇談など保護者同伴の機会などを利用し事後の取り組みを進めていく。 ○感染症対策などについても予防できるような態度を養っていきけるよう保健委員会活動などいろいろな機会を通して啓発していく必要がある。		
		医療勧告書など生涯にわたって健康的に生活していける態度を涵養する。	3						
		掲示物などを校内においても健康に対する啓発活動を展開する。	4						
	運動・食と健康の関連性を理解させる。	体育行事を通して運動と健康との関わりや必要性を理解させる。	4	4	4		(成果) ○体育行事に積極的に参加することで満足感や達成感が得られたと思う。 ○本校運動部員や生徒会がそれらを成功させ、それが一体感や愛校心を育み、活気ある学校生活が送れるという集団の健康につながるということが理解されてきた。 ○朝食に関して言えば概ね基本的な生活習慣は確立されているように思われる。 ○体つくりのため栄養を補給するという意識は運動部員を中心に養われてきた。 (課題) ○夜食や間食の取り方やより体に良い物を選んで食べる意識を持たせる。	○体育行事のみならず、学校行事において今まで以上に協力を求めていき、自覚と愛校心を養えるよう指導していきたく。 ○食に対して意識の高い生徒が増えてきたように思われる。今後も授業と連携しより有意義な情報を発信し、また指導していく機会を持ちたい。	
		運動部員など生徒を計画・運営に参加させ一体感や愛校心を育成する。	4						
		食習慣の把握に努め正しい食習慣を実践できるような態度を育てる。	4						
	学校内外の環境美化に努める意識を育てる。	自主的に校内外の環境美化活動を推進できる態度を育成する。	4	3	3		(成果) ○生徒会やクラブ員が中心となって通学路や地域の清掃活動がなされ、十分な成果を挙げている。 ○美化委員が中心となりポスターなど啓発活動や各行事においても環境美化に努めている。 ○日々の清掃や文化祭での大量のごみなどについては分別されている。 (課題) ○購買との連絡を取りながら、日程の調整などは行えたが、マナーの指導などは出来なかった。	○美化委員会活動や掲示物などにより環境美化に対しての意識を高め、意欲的に行動に移せるような態度を育成していきたく。 ○日々の清掃に加え、行事にあわせて、大掃除など拡大清掃を実施する環境整備に努めていきたく。	
		校内において分別収集などを推進し生涯にわたり循環型社会を担うことを理解させる。	3						
		購買の利用やマナーの向上のための啓発に努める。	3						
	文化図書部	読書習慣の確立	各教科・各分掌との連携を図り、蔵書の充実を行い、年間貸し出し冊数2000冊以上をめざす。	4	4		(成果) ○年間貸し出し数は目標の2000冊以上であった。 ○年2回(3年生は1回)の朝の読書を実施し、80%以上が好評であった。 ○また、この時期の図書室利用が増えた。図書委員は年間6回開催し、カウンター業務や行事の運営、広報活動を行った。 (課題) ○学年が進むと共に図書利用数が減少している。 ○各教科分掌からの推薦図書が一部に限られてしまった。	○読書習慣の確立を進めるには、各教科・分掌との連携が欠かせないので、粘り強く推薦図書の提出をお願いしていく。 ○朝の読書を今後も続け読書のよさを理解させる。	
図書委員会を学期毎に開催し、広報活動を充実させる。			3						
文化・芸術・伝統への理解推進		文化鑑賞会を年1回開催し、文化に対する意識を高める。	4	4	4		(成果) ○文化鑑賞会は本校体育館でミュージカル「真夏の夜の夢」を企画運営し、生徒の9割以上の高評価を得ることができた。 ○カルタ大会は1年生で実施し、80%以上の生徒がよかったと回答している。対戦形式で楽しみながら、百人一首に親しむことができた。 ○文化委員会は年9回開催し、文化鑑賞会、文化祭、文化講座の運営に努めた。 (課題) ○文化講座については、文化委員・図書委員の他に7名の参加にとどまった。	○文化鑑賞会はさらに充実した内容のものを企画していきたく。 ○契約の手続きの都合もあり実施は2学期になる。カルタ大会では、クラス対抗も視野に入れて対戦形式に工夫をしていきたく。 ○文化講座の参加の確保が難しいので、時期や内容の検討が必要である。	
		百人一首カルタ大会を開催し、日本古典文化への理解と関心を深める。	4						
		文化委員会を学期毎に開催し、文化祭や文化講座などの充実を努める。	4						
生徒会指導部	生徒会活動を他分掌と連携して、生徒同士の連帯感や愛校心を高める、リーダーを育成する。	生徒会役員と専門委員会(総務委員会)との連携をはかり、各学期に1回以上、委員会の発案で取り組む。	3	3	3	(成果) ○各専門委員会で活発な活動があり、生徒会本部役員の活動も充実している。 (課題) ○生徒会本部と各専門委員会の連携不足及び各専門委員会の委員長が形式上な立場になっている。	○生徒会指導部員の部会での調整・連携を綿密に行い、仕事内容を明確化し助け合うことで行事準備・支援を行う。 ○生徒が携わる指導に関わる内容を総務企画部・生徒指導部など関係分掌とも連携していくために、分掌部長間(分掌部員間)通しの打ち合わせを必要に応じて必ず実施する。		
		全校生徒の10%が、オリエンテーションコンダクター(リーダー研修)の活動に自ら参加し、学校行事運営を行うことで成就感をえる。	3						
		部活動が、練習経験を積みながら、キャプテン(部長)会議・部活動集会などを各学期1回以上行い、各部活動内外の活動を尊重し、応援しあえる仲間作りを構築していく。	3						
	地域との連携を通して交流できる開かれた学校を双方向で発信していく。	秋風のコンサート・オープンスクール・各部活動等を通じて、本校のもつ教育力を存分に発信するとともに、保護者・卒業生・地域の方々の教育力を取り込んでいく行事を3回以上行う。	4	4			(成果) ○幼保中大を巻き込んだ「秋風のコンサート」や「あいさつ運動」だけでなく、地域の防犯・安全に対する活動を自転車の鍵の施錠率向上という目に見えるような形で、校内で実践できた。 (課題) ○次年度の校外行事での生徒会中心の体制ができるのがが危惧される。		
		分掌内の分担内容を明確化し連携につとめる。	3						
		分掌内の分担内容を各役員が理解し、本校生徒の力を最大限引き出すための機能的な運営を図る。	3				(成果) ○分掌の先生方が、学校行事で先頭を切って職員を牽引し、生徒会本部役員の指導も親身になって行う。 (課題) ○職員会議等に出す議案を短い時間でも意思疎通をするために分掌会議を定例化することが必要。		
国語科	より良い評価方法の確立	シラバスを活用した観点別評価を導入し、生徒一人一人に応じた学力の向上を図る。	4	4		○シラバスの振り返りにより、学習成果について生徒自身が確認できる有意義な機会となっている。また、週1コマ教科会議の枠が確保され、打ち合わせがスムーズに行えるようになった。	○基礎学力充実に向けた本校生徒の課題についての精緻な分析及び研究。 ○教材開発に向けた研修機会の確保。 ○生徒が具体的にイメージしやすいシラバス振り返り項目の検討。		
	日々の授業を通して基礎・基本の徹底をはかる。	音読指導を単元毎に行い、言葉に対する感性を高める。	3			3			○各時間音読を取り入れることができたが、生徒の主体的な取り組みには至らなかった。 ○生徒の文法事項習得段階を考慮して授業を計画した。文法事項に高い理解度を示す生徒が見られる一方で、基礎段階でのつまづきが見られる生徒も一定数存在し、この克服が今後の課題である。
		古典文法を理解させることに努め、50%以上の生徒に基礎力の定着をはかる。	3						
	授業の範囲に留まらず、日常の生活の中で言葉や活字に対する興味を喚起させる。	新聞教材など話題性のある教材や作品を効果的に扱う。	3			3			○図書室より、授業で取り上げた作品や作家関連図書を展示・紹介いただき、生徒の興味・関心を増すことができた。
		図書室と連携し、関連教材の提示を効果的に行う。	3						
国語の様々な分野で自己表現の実践の場を多く持ち、生徒に自信をつけさせる。	アクティブラーニングをふまえた自己表現の時間を10%設定する。	4	4		○学習における必須事項は広範囲にわたるため、なかなか生徒による自己表現の機会が確保できなかった。 ○観点別評価をふまえた参加型学習、教材作成、定期考査実施により、生徒の主体的な学習活動への萌芽が見られた。				
	様々な場、形式で「書く・発表する」ことで、表現の楽しさを味わい、自己表現に対する抵抗感を軽減する。	4							

地歴・公民科	より良い評価方法の確立	シラバスを活用した観点別評価を導入し、生徒一人一人に応じた学力の向上を図る。	3	(成果) ○生徒の自己評価を参考に授業を改善し、生徒がより一層学習内容に興味・関心を持ち、着実に学力向上が図れるよう配慮した。 (課題) ○科目の枠をこえて、授業改善のポイント等を共有することができなかった。	○相互の授業協力・参観等を活発に行い、授業の状態を随時チェックしていく必要がある。
	地理・歴史・公民に対する関心を高め、知識・理解を深めることを通じて、地理的・歴史的・公民的思考力を育う。	視聴覚教材の積極的な利用(年間授業時間数の10%程度は用いる)を進める。	4	(成果) ○ビデオ、写真、図表等々の利用を進め、概ね10%程度視聴覚教材の利用は達成できた。 (課題) ○視聴覚教材の利用を通して得た知識や情報の活用を十分に行うことができなかった。	○アクティブラーニング型授業等を実施する中で、知識を内化する場面、活用(外化)する場面等々をしっかりと整理した授業をつくり、展開する必要がある。
		学期に一度は、図書室等を利用して調べ学習を実施し、生徒が自主的に学び、活動する機会を設ける。	3	(成果) ○調べ学習については、主体的学習の基本的な部分として積極的にを行い、回数も増えた。 (課題) ○調べ学習は宿題が中心で、授業時間内に図書室等を使って実施することができなかった。	
	アクティブラーニングを実施することを通して、21世紀を生きる根源的な力(キーコンピテンシー)を育成する。	言葉・情報・知識等を活発に活用するために、探究型・参加型学習の一環として、学期に一度は発表学習を行う。	3	(成果) ○概ね、学期に一度の発表学習を行うことができた。 (課題) ○発表に至るプロセスから得ることが可能な学習成果(キーコンピテンシーの育成)を軽視した。	○キーコンピテンシー(知識や情報を相互作用的に用いる、仲間と協働する、自立的に活動する)を育くむことを目的とした授業を目的通り実践するためには、教科内で更に研修を積み重ねる必要がある。
		学習仲間と関わり、協力するために単元一度はペアワーク・グループワークを行う。	3	(成果) ○単元一度のペアワークやグループワークは多くの科目で実施することができた。 (課題) ○学習手段であるはずのペアワーク・グループワークを目的化してしまったところがあった。	
日常の学習活動の中で、基礎・基本の充実を図る。	知識の定着を目指し(認知プロセスの外化)、レポート、小テスト等を単元ごとに一度は課し、学習状況を確認する。	4	(成果) ○ほとんどの科目で、小テスト、レポート等を単元ごとに課し、学習状況を確認することができた。 (課題) ○アクティブラーニング等の実施を考慮し、活用できる知識の習得を考える必要がある。	○授業を計画する段階から活用できる知識の習得を視野に入れて、模範的な活用場面までしっかりと設定した授業の構成を考える必要がある。	
	論理力の育成を図るために、単元ごとに一度はまとまって資料を読む機会を持つ。	3	(成果) ○単元ごとにとまではいかなかったが、資料を読む機会はできるだけ多く持つよう努めた。 (課題) ○資料を読み解き、それらをどの程度活用する必要があるのかを示すべきであった。		
数学科	より良い評価方法の確立	シラバスを活用した観点別評価を導入し、生徒一人一人に応じた学力の向上を図る。	4	○シラバスを活用することにより、考査後の振り返りをすることができた。しかし、わかっているつもりでも、実際に「できる」とは違うので、そこで自己評価との乖離が生まれている面もある。観点別評価については、各観点ごとの成績の偏りをなくすよう、小テスト、定期考査などで、出題分野・内容を考えている。	○考査前、模試前以外の時期で、生徒の学習意欲を高めることが急務である。 ○模試対策を行う時期や、小テスト、提出物の時期を再考し、日頃から継続的に生徒に学習させるように計画を立てることが必要である。 ○数学が得意・好きな生徒においては、現在の授業でも余力がある状況なので、習熟度別授業を活かしてさらに応用的な問題に取り組んだり、個人的に声をかけても難しい問題に取り組むように指導していくことが必要であると考える。
	基本的な知識の習得と技能の習熟を図り、それらを的確に活用する能力を伸ばす。	苦手な生徒には個別指導を行い、追認考査対象生徒をなくす。得意な生徒には問題集を自主的に解かせ、実力養成講座への参加を促す。	4	○数学が苦手な生徒も、意欲的に補習に参加し、考査前には数学の教員を探して質問する光景が見られた。得意な生徒は、次々と自主的に学ぼうとし、実力養成講座にも積極的に、さらなる応用力をつけている生徒も多く見られた。また、そのような生徒に対しても助言をすることができた。	
	家庭学習の習慣を身につけさせる。	必ず宿題を出させる。提出物の期限や定期考査直前に学習を始めるのではなく、普段から計画的に学習するように指導する。	3	○宿題の提出率は改善されているように思われるが、提出期限ぎりぎりに取り組み、中身が薄いものが目立つ。家庭学習の習慣も定着しているとはいえず、定期考査や小テストの直前になって焦る生徒が多いように見えた。	
	日々の授業を通して、数学的な見方や考え方を認識し、数学の楽しさ・おもしろさを感じられる生徒を育てる。	授業に集中させ、興味・関心をもたせる教材を工夫する。身の回りの現象を数学的にとらえた教材を積極的に授業に取り入れる。また、そういった問題を解くとき、グループワークなどのアクティブラーニングを取り入れた授業を行う。	3	○数学に興味・関心を持つ生徒もいるが、一部に限られている現状である。難しい問題を解くときに周りの人と学び合いをするなど、意欲的な面も見られ、協同的な学習をできた科目もある。	
理科	より良い評価方法の確立	シラバスを活用した観点別評価を導入し、生徒一人一人に応じた学力の向上を図る。	3	○個人別振り返りシートの導入により生徒個々の状況がよくわかる。次年度では、学習のためには何が必要であったか確認できるよう工夫していきたい。	○よりいっそうの興味・関心を持たせるために、毎授業何かに触れさせ考えさせることが望ましいが、現環境では難しい面があるので、授業内容に合わせて工夫を行う必要がある。できる限りモデルや器具に触れさせ、原理を追求させるような授業展開を心掛けるために、綿密な学習計画を立てていきたい。 ○また、そのときの生徒の反応に応じて柔軟に対応していく必要も感じられる。
	教材研究の時間を確保し、生徒が主体となる授業を心がける。	身近な事例を取り上げ、仕組みを考えさせる。各授業で「なぜ」と思わせ、その解消の手助けをする。	4	○現段階での生徒の到達度より、授業のスタイルを柔軟にあわせる事ができている。 ○生徒自身が考えを深める時間を作り、興味や関心を引くような教材作りを心掛けている。 ○今後は、よりいっそう生徒たちが興味・関心を持てる教材や流れを作っていく。	
	各単元に対応した実験を行い、自然科学に対する興味・関心を高めさせる。	各考査毎に1回は本物を体験させる。学期に1回は生徒に実験をさせる。実験器具の管理を確実に実行する。	4	○今年度は、学習内容に応じて必ず映像を見せたり実験を行っている。 ○来年度も継続して観察・実験を行っていく。	
	理系学部進学希望者の進路実現を目指す。	個々の生徒が必要としている情報を厳選して集める。入試問題を研究し、入試に対応できる実力の向上を図る。	4	○個々に応じた様々な対応を行ってきた。最新の情報や現況を吟味し、個人の意志に沿った形で進路指導を行っており、また実力養成講座も充実させている。 来年度も継続して行いたい。	
保健体育科	運動に主体的に取り組む体験を通して、生涯にわたって運動を継続する力を身に付けさせる。	1・2年生の授業でグループ学習、2・3年生についてはグループノートの内容の充実を図る。運動に主体的に取り組む体験を通して、生涯にわたって運動を継続する力を身に付けさせる。	4	○グループ学習において、生徒同士の話し合いの機会を設けたり、グループ毎のノートや学習カードによって生徒自身が授業を振り返ることができるようになった。 ○また、ノートや学習カードを用いることにより生徒の課題や問題点などを見つけ出す手立となった。	○教師主導型の授業から、生徒自身が主体的に取り組む授業形態を多く用いる。評価基準や評価方法を生徒に示すことにより、毎回の授業において、どのように評価しているのかを、明確にする。 ○思考・判断や知識・理解の評価においては、学習カードやグループノートを活用するとともに、生徒の実態把握と生徒の課題解決の手立てとする。 ○体育理論の授業内容を充実させ、生徒間の意見交換などを行い、生涯にわたってスポーツに取り組む態度を育てる。 ○生涯にわたって健康を保持増進させるため、体育実技の授業との保健授業との関連を密にし、発達段階に応じた健康課題を理解させ、自ら健康管理が実践できるように育成する。
	運動の合理的な実践を通して、健康の保持増進と基礎的体力の向上を図る。	体調に応じて運動量を調整したり、仲間や相手の技能・体力の程度に応じて配慮できる能力を育てる。体育理論では、スポーツの意義や歴史、文化的特徴の理解およびスポーツに対する意識の向上を図る。	4	○年間を通して、準備運動や補強運動を継続し体力の向上に努めることができた。 ○また、グループ学習によって、自己の健康状態だけでなく、仲間や相手の技能や体力なども考慮しながら話し合いや練習・試合ができた。 ○体育理論では、障害者スポーツ(ボッチャ)について体験学習を行い、オリンピック・パラリンピックの意義について理解を深めることができた。	
	健康と安全について総合的に理解を含め、これらの今日的課題に対し、主体的に取り組む、改善・維持・管理していく力を身に付けさせる。	生き生きとした社会生活を送るために必要な健康に関する知識を習得する。生涯にわたって健康に生活するために、生活習慣の指標を身につけさせる。応急手当やAEDの使用法を含めた心肺蘇生法の手順を身に付けさせる。	4	○生涯の各段階における、健康課題に応じて、自らがこれに適切に対応するために、健康に関する知識を活用・実践できるような指導することができた。 ○また、応急手当や熱中症対策、心肺蘇生法(実習含む)について学習し、適切な応急手当や処置によって、傷害や疾病の軽減や人命救助につなげる意識を身につけた。	

音楽科	様々な音楽における興味・関心・意欲を養わせ、幅広い音楽における鑑賞能力を高めさせる。	古今東西の幅広い音楽にふれる中で、自ら様々な音楽活動に取り組む姿勢を身に付け、生涯にわたり音楽を愛好する心情を育成するとともに、より一層深い鑑賞能力を育成する。	4	4	<ul style="list-style-type: none"> ○全体的に多くの生徒が様々な音楽活動に意欲的に取り組んでいた。 ○生徒個々が音楽における諸能力を向上させていけるように、様々なレベルに対応しながら、モチベーションのさらなる向上を目指し、工夫を重ねていきたい。 	○すべての生徒が意欲的に音楽の諸能力をバランスよく向上させていけるように、授業展開に工夫をしていきたい。
	音楽における豊かな表現力や独自の創造力を高めさせる。	読譜力を高めるとともに、幅広い歌唱・器楽演奏活動を通して、表現力をさらに高め、また、自ら音楽を創造する能力を育成する。	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ○音楽科における基礎基本となる諸能力を身につける時間を確保しながら、生徒個々の演奏能力や表現力、創造力を高めるような授業を展開したい。 	
美術科	見る・描く・作るの基礎を身につけ表現する喜びを体験させながら、様々な美術作品に関する知識を身につけさせる。	デッサンの基礎能力を身につけて、画材・用具の多様な表現力をつけさせる。美術史上の画家や、その生涯と作品について知り、名画の鑑賞能力を身につけさせる。	4	4	<ul style="list-style-type: none"> ○手、人物、静物をデッサンすることで、鉛筆、ペン、水彩、アクリルガッシュ、版画等、様々な画材の用具を使い、その特徴を生かした表現ができた。 ○また、美術史を学び、11名の画家の名画や人生、時代背景を紹介することで、生徒は興味を持ち、熱心に学ぼうとする意欲が感じられた。 	○芸術は才能に恵まれた者のものではなく、自分の思いを表現することであるということを経験し、楽しく制作している様子も見られるので、作りたい思い(自発性)、表現の追求(自主性)、完成の喜びと意欲(主体性)を伸ばしていきたい。
	美術を愛好する心情を育て感性を高めさせる。	それぞれの個性を認識させ、それを活かす方法を考えさせる。	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ○4つの自画像では、自己の内面を抽象画にしたり、カレンダー制作や色彩構成絵本作品においても、それぞれの個性を生かした表現ができた。 	
書道科	書の歴史を学び、名品名跡の鑑賞力を身につけさせる。日常における書写能力を身につけさせる。	できるだけ多くの名品名跡にふれ、古典臨書にじっくり取り組ませる。実用的な書に取り組みさせる。生活の中の様々な書に目を向けさせる。	4	4	<ul style="list-style-type: none"> ○多くの古典作品にふれることで、臨書、鑑賞を中心に学習を進めることができた。 ○漢字仮名交じりの書では、自分なりの創作にも取り組んだ。 ○ペン字やのし袋の書き方、様々な書作品を紹介することで、書が身近にあることが認識できた。 	○個人の能力の差が大きいので、個に応じた対応を心がけつつ、それぞれの表現のよいところを引き出せるような指導の工夫をしていきたい。
	書美を表現する力を身につけさせる。	古典臨書を通じて様々な表現技術を身につけさせる。作品制作に意欲的に取り組ませる。	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ○各古典による特徴の違いを自分なりに意識し、表現しようとしていた。 ○篆刻では、小さな石の中で表現される美の世界を理解し、創作できた。 	
英語科	より良い評価方法の確立	シラバスを活用した観点別評価を導入し、生徒一人一人に応じた学力の向上を図る。	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ○定期考査ごとに、各レッスンや項目における観点の確認やシラバスの見直しを行い、 ○また生徒の自己評価を参考にし授業に取り組むことができた。 	○シラバスの見直しにより、生徒が一層学習内容に興味・関心を持ち、学力の向上を図れるよう取り組んでいきたい。
	4領域(リスニング・スピーキング・リーディング・ライティング)をバランスよく学べるよう、生徒が英語に興味・関心を持つよう指導の工夫をする。	定期考査や授業を通して、生徒の4領域の学習度合いを測る。また、課題や小テストを定期的に行い、到達度を把握し、きめ細かい指導を行う。	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ○4技能をバランス良く伸ばす授業に取り組む努力を行っているが、入試を控えた3年生の授業では、リーディングに重きを置く傾向になってしまった。 ○ライティングに関しては、生徒が書いたものを添削して評価するだけでなく、スピーチの形で評価するといった、パフォーマンステストの形を取り入れることで、生徒のモチベーションや英語に関する興味・関心を高めていきたい。 	
		各学期に1回、英語検定などの検定を紹介することで、生徒に関心を持たせ、指導に努める。	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ○英語検定に向けて、担当者が協力して、2次試験のインタビューテストの練習を行うだけでなく、1次試験の筆記試験に対しても一斉に過去問に取り組ませるなど、バックアップ体制がより強化されつつある。 	
		1、2年の3学期にGTECを実施し、CTを活用するなどしながらリスニング力やライティング力の向上に努める。	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ○3学期のCTの活用を見直し、1・2年合同でリスニング強化に取り組むことができた。 ○さらにGTECの実施時期についても検討することができた。 	
	リーディング力の向上に必要な語彙力や、文法力を定着させる。	教科書、補助教材を活用し、最低でも毎週1回単語テストを行い、語彙力の強化に努める。	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ○言葉指導に関しては、学年の実態に応じた計画を立てて週1回の単語テストを行い、語彙力の強化に努めている。 	
	リーディング力の向上に必要な語彙力や、文法力を定着させる。	リーディングの基本となる単語については、1年生で2000語、2年生で3500語、3年生で5000語の習得を目指す。	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ○長期休業中の課題も含め、継続して家庭学習の習慣化に取り組んでいきたい。 	
1、2年生は少人数編成による講座の実施により文法力の強化を目指す。また3年生では実力養成講座等で生徒のニーズに応じた指導を目指す。	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ○英語表現 I および II において、英語が苦手な生徒にも目を配り、きめ細かい指導を行うことができた。 ○3年生においては、生徒の進路実現に向けて、教材などの工夫をすることができた。 			
家庭科	より良い評価方法の確立	シラバスを活用した観点別評価を導入し、生徒一人一人に応じた学力の向上を図る。	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ○自己評価表により各学習項目で80%以上の生徒がA,Bの評価しており、学習の成果を共有することができた。しかし、提出物が出ないなど明らかにできていない項目でもAやBをつけている生徒も少数ではあるがいるので学習課題のさらなる確認が必要であると感じた。 	○自己評価表の活用は学習目標や学習成果を生徒自身が確認しやすく、効果的であった。さらに活用するために自己評価が誤解されない形式に開眼する必要がある。実習室の老朽化で電気やガスなどの使用に危険が伴うため、改修工事の要望をする必要がある。 ○特に来年度より「発展家庭」(3年選択)が実施されるため、実習室の使用頻度は増加する。また、学習成果を向上させるためには、実習は大切な授業形式である。生徒の安全を確保するためには避けて通れない問題である。
	人の一生と家族・家庭及び福祉・衣食住、消費生活などに関する基礎的・基本的な知識と技術を習得する。	分野ごとに実習や演習など体験学習を行う。アクティブラーニングを活用した学習を学期毎に取り入れる。観点別評価を取り入れるとともに、生徒の自己評価表を活用し学習効果の向上に努める。	4	3	<ul style="list-style-type: none"> ○各分野毎に実習や演習を実施し、体験学習を重視した。また、ALの手法を取り入れ、生徒が主体的に考え学習する内容がけた。 ○自己評価も80%以上がAやBで学習効果があったと実感している。ただ、学期が進むと難易度も上がるため、Aが少し減少しBが増える傾向にあった。 	
	家庭や地域の生活課題を主体的に解決する実践的な態度を育てる。	ホームプロジェクトに年2回取り組ませる。学校家庭クラブ活動を充実させ、参加させる。	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ○ホームプロジェクトを2回実施し、生活課題について取り組みレポート作成、発表、評価を行った。90%以上の生徒がA、Bの評価をしている。保育所訪問、交通安全啓発活動、ろう学校との交流会など地域との交流や安全活動として学校家庭クラブ活動を実施した。全員が何らかの活動に参加し、熱心に取り組む、あたたかい励ましとお礼をいただいた。 ○来年は、県の役員校にあたるので、県の活動にも取り組むことが求められてくる。 	
情報科	より良い評価方法の確立	シラバスを活用した観点別評価を導入し、生徒一人一人に応じた学力の向上を図る。	4	4	<ul style="list-style-type: none"> ○4観点のバランスをとれるような評価計画を立てて実施した。 ○各学期始めに、シラバスで計画を明示し、終わりには自己評価表により自己点検をさせて学習の振り返りを行った。また、発表学習時には、自己評価・他者評価を行った。 	○情報モラルについて、学校活動すべてで、より深く学習する必要がある。 ○教科「情報」の学習が終了してからも、継続して学習を進めるように各教科とのつながりを意識していきたい。
	情報技術を科学的に考える力を身に付ける。	情報の受信者として気をつけることを考えさせる。著作権などの法律を学習する。	4	4	<ul style="list-style-type: none"> ○表計算ソフトなどのソフトを活用できる力を育てるために、具体的な教材での実習を行った。 ○プレゼンテーションソフトで、コミュニケーション力の育成を行った。 	
	情報機器を問題解決に効果的に使えるようにする。	プレゼンテーションソフト、表計算ソフトを使用する実習を行う。教室での教科書をベースとした授業と情報学習室での実習の授業を行う。	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ○各メディアの持つ特徴から、情報の受信者として気をつけることを考えさせた。 ○教室での教科書をベースとした授業で、多岐にわたる分野を学習した。 	